

国語 1次 正答率・講評

問題	正答率 (%)				講評
	受験者		合格者		
	完全	部分	完全	部分	
問一	14.7	85.3	23.0	77.0	<p>問題文の出典はドリアン助川『多摩川物語』による。中学3年生の雅之君が元イラストレーターでホームレスのパンさんとの交流を描いた小説である。文章は平易であるが、分量はやや多いので、場面や状況を整理しながら読解を進める必要がある。</p> <p>問一～問四は言葉についての基礎的な問題（漢字の書き取り、語句の意味、オノマトペ）。概ねよくできていた。漢字では「指針」「評判」のミスが多く、特に「指針」は語義自体が理解されていないと思われる解答が目立った。漢字力と語彙力はリンクしているので、ぜひそのことを意識して学習に取り組んでほしい。またオノマトペでは「びちゃびちゃ」と「ごつごつ」の入れ違いが見られた。日常生活の中で音に触れる機会を大切にするとよい。</p> <p>問五～問十四は段落ごとの読解や言葉の抜き出しを中心とする問題。特に問九の正答率は非常に低く、「なにか言い」「自分のこと」など、直前部分を抜き出す解答が多かった。ここでは、雅之君が単に訴えたい内容ではなく、設問に書かれている通り、雅之君が「言葉に出さずに抱えてる思い」を抜き出す問題である。もちろん、直前部分は解答する上で注目すべきポイントではあるが、設問を良く読み、その意図を理解することが求められる。</p> <p>問十五・十六は記述問題で、総合的にみると、ここでの得点の有無が、大きく合否を分けたようである。まず問十五は雅之君の心の揺れへの理解を問う問題であるが、本文に即して考えるならば「自分が偽善者であることへの自覚」「自分が築き上げてきたものが崩れていくような不安」の2点がポイントとなる。しかし「パンさんに会わなくなってしまったことへの申し訳なさ」「パンさんの安否を心配する気持ち」といった単なる事実関係を説明した解答が多く、特に「自分が築き上げてきたものが崩れていくような不安」の要素まで踏み込んだ解答は少なかった。問十六は傍線部の「根」の解釈とそれを踏まえて具体的な経験を問う問題であったが、「根」の解釈を「人間の心」「性格」「努力」等とする、的外れな解答が多く見受けられた。まずは「根」を外側からは見えないものであること、そのもの自体を支えているものだということを踏まえて、自身の経験につなげてほしい。また問題文をよく読んでいなかったのか、「根」の説明がないものや提示した例が適切でないものが多く見受けられた。記述問題に関しては、日頃から問題の条件に合わせて解答を作る練習が大切である。</p>
問二	34.7	60.6	32.4	62.2	
問三	31.2	68.8	39.2	60.8	
問四	81.8	17.6	98.6	1.4	
問五	92.9		95.9		
問六	82.4		89.2		
問七	59.4		71.6		
問八	64.7	30.0	71.6	27.0	
問九	8.2		9.5		
問十	53.5		62.2		
問十一	44.7		55.4		
問十二	48.8		47.3		
問十三	40.0	58.8	45.9	54.1	
問十四	49.4	8.8	54.1	6.8	
問十五	0.0	61.2	0.0	63.5	
問十六	0.0	25.9	0.0	35.1	

国語 2次 正答率・講評

問題	正答率 (%)				講評
	受験者		合格者		
	完全	部分	完全	部分	
問一	61.9	37.8	68.3	31.7	<p>出典は木地雅映子の『水の海のガレオン』である。クラスメイトとの間に違和を感じている「杉子」という十一歳の女の子の複雑な思いを「言葉」に関する感受性と表現の仕方に目を向けながら考えられるように、抜粋をつなげる形でまとめたものが、本文となっている。</p> <p>自己と結びつく自分の言葉を保持していくことは、美しく高潔ではあるが危うい。日常生活においても周囲との軋轢を生じさせていくことになる。だが、それは本人が自分の手によって越えていかなければならない課題でもあるのだ。孤独ではある。自分の言葉を手放そうとしない者たちもいるが、ともに手を取り合うことはできないからだ。それぞれが自分の道において自らで立ち向かわなければならない問題がある。この本文の中核にあるのは、その地点に立った少女の物語である。</p> <p>参考文は三つ挙げられており、出典は①が二階堂奥歯の『八本脚の蝶』、②が詩人吉本隆明の『詩とはなにか 世界を凍らせる言葉』、③が菅野覚明の『詩と国家 「かたち」としての言葉論』である。参考文①では「杉子」の今後に目が向けられている。参考文②では「世界を凍らせる言葉」としてある「詩」によって「ほんとうのこと」を示すことの矜持が述べられていた。そして、参考文③では「私の言語の限界」を突破する可能性が示されている。参考文を辿ることで、「杉子」が抱え込んだ困難を打開する可能性を模索するという流れになっていた。二階堂奥歯の問いは重く、答えは実人生のなかで示されるしかないものではあるが、「杉子」の進む未来に僅かばかりでも光がもたらされるものであればと思う。</p> <p>受験生も今後の人生において、多かれ少なかれ「自分の言葉」によって支えられた世界が動揺する危機と向かい合うことがあるだろう。すでに経験してきたか、現在渦中にある受験生もいるかもしれない。このような問題と向かい合う人たちにむけたメッセージとしての意味合いも、今回の入学試験第2次の国語の問題には含まれていた。</p> <p>問一は㉔において「程度」の「程」を「低/提/定」と記した解答が散見された。また、㉕では「思春期」の「思」を「始」とした解答があり、㉖では「減」の「さんずい」の右側を「或」と記している解答が見られた。</p> <p>問二は語彙に関する問題で、辞書的な意味合いを踏まえた上で文章中の意味合いに合わせて解答しなければならないため、基礎的な問題とはいえ難度は高めであったといえるだろう。4問の出題で完全正解者は少なかった。</p> <p>問九は抜き出し問題ではあったが、範囲の限定がなかった分、探しにくかったのかもしれない。合格者の正答率でも4割を切っていたが、本文の読解の精度において差がつく問題であったといえるだろう。</p> <p>問十は設問にあった『「あたらしい女の先生」の授業に対して』という指定を見落としていると思われる解答が目立った。解答は「先生」ではなく、「授業」に焦点化して作成しなければならない。以前の授業と比べながらやる気のない生徒へ対応や授業を受けようとする生徒の感性や主体性の尊重といった複数の要素を六十字に圧縮して文章にまとめることは難しく、記述問題として難易度の高い問題であった。</p> <p>問十一から問十七までは選択肢の問題であり、この範囲の受験生全体の正答率平均が5割台、合格者の正答率平均で6割台となっていた。この差が可否を分ける大きな要素になっていたと思われる。問十一では合格者の正答率は8割台、十二、十四では7割を越えていた。問十三は正解を導くにあたり、音楽室が単なる休憩場所ではなく、一時の避難場所であると同時に孤独に気づかされた場所でもあるという負の側面も読み込まなければならなかった分、難易度が高かったようで、正答率は高くなかった。</p> <p>問十八では抜き出しにおける誤字が多くみられた。特に「孤独」の「孤」の書き間違いが多かった。他の設問の処理が追い付かない場合、空欄が多くなることも予想していたが、問十九と同様、解答を書き切った答案が多く、全体として情報処理の速度が速く、筆力のある受験生が多かったといえるだろう。</p> <p>問十九は発展的な問題として、本文の読解に加えて、主に発想力と表現力を問う問題となっていた。解答に挙げられていた具体例としては、海外での体験、家族との静い、小学校でのグループ発表や塾での解法説明での出来事などがあった。固有の経験に根差した気づきや発見には様々なものがあり、多くの受験生の学びの一端を垣間見ることができた。具体例と気づきや発見との関連が十分に説明できていない答案も見られたが、着眼点だけでなく記述における語彙の選択も含めてよく書けている解答がいくつもあった。当然それらの得点は高く、空欄の解答も一定数あることから、差がつく問題となっていた。</p> <p>語彙力は直接意味を問われる設問だけでなく、本文読解、選択肢の吟味、記述の際の言葉選びにも影響を与えるものである。ことわざや慣用語だけではなく、文章内で使われる幾分難しめの言葉にも注意して学習を進め、実際に使用する機会を増やしてくれるとよいだろう。読解力と記述力をバランスよく身につけていくことを大切にしてもらいたい。</p>
問二	6.8	89.3	10.2	88.3	
問三	73.7	26.0	81.5	18.5	
問四	81.6	18.1	87.3	12.7	
問五	70.1		74.6		
問六	89.3		90.7		
問七	64.7	21.1	71.2	18.5	
問八	31.2	60.0	36.1	57.6	
問九	29.0	0.0	36.6	0.0	
問十	0.0	82.7	0.0	85.4	
問十一	79.5		86.3		
問十二	61.6		71.2		
問十三	38.4		43.4		
問十四	62.2		70.2		
問十五	53.7		61.5		
問十六	56.4		64.9		
問十七	55.1		64.4		
問十八	11.2	75.1	15.6	76.6	
問十九	17.3	59.3	21.0	62.9	

国語 3次 正答率・講評

問題	正答率 (%)				講評
	受験者		合格者		
	完全	部分	完全	部分	
問一	43.0	57.0	58.0	42.0	<p>出典は渡邊十糸子『今を生きるための現代詩』第3章「日本語の詩の可能性 安東次男のことば」である。筆者が中学生の頃に現代詩を「わからない」まま画像として書き写していたというエピソードを導きの糸に、日本語に特有の表記上の特徴を論じ、安東次男が詩「みぞれ」で表現しようとしたことに迫っていく評論文である。本文が長いことに加え、現代詩というなじみの薄いテーマの文章にとまどった受験生も多かったようである。</p> <p>問一 「文脈」の「文」を「分」としているもの、「容易」の「容」を「用」としているもの、「検証」の「検」を「研」「験」「見」にしているもの、「貧弱」の「貧」の上の作りを「今」にしているもの、「職場」の「職」を言偏で書いているもの、「演奏」の「奏」の字の部分を「夫」としているもの、「印刷」の「印」を「引」、「刷」を「冊」としているもの、が見受けられた。</p> <p>問二 慣用句を問う問題であったが、A「鼻につく」C「手管」の出来がよくなかった。体の一部を使った慣用句の問題は本校では頻出の形式である。</p> <p>問四～問七 選択肢問題。各問中では問五で顕著に差がついた。傍線部前後の表現意図をくみとったうえで、比較的長い選択肢を検討しなければいけなかったため、負荷の大きい問題であった。</p> <p>問十 Iの抜き出し問題では、書き抜きの漢字間違いが多数見受けられた。え「明治維新」の「新」を「進」としているもの、お「和製漢語」の「製」を「制」としているもの、か「音韻」の「韻」の書き間違えているもの、が見受けられた。IIの記述問題では、日本語の表記の多様性について記述する解答が多数見られた。</p> <p>問十一 「文字のうらづけ」の内容を言い換えた箇所を抜き出す問題。誤答として、「音声が無力であるためにことばが文字のうらづけをまたなければ意味を持ち得ない」を抜き出しているものが多数見受けられたが、設問の指定時数を大幅に超過しているだけでなく、抜き出し箇所に言い換えるべき表現（「文字のうらづけ」）を含んでしまっている。落ち着いて設問の指示を理解することが大切。</p> <p>問十三 詩の中から「具体的な『指示』を二つ挙げて説明しなさい」という設問の指示を踏まえていない解答が多く見受けられた。</p> <p>問十四 理解できなかった芸術作品の例を挙げて、「わからないこと」の「独特の価値」について説明する問題。最初に「わからない」芸術作品を挙げ、親・兄弟・友人・作者に作品の意図や表現について質問をしたところ、説明を聞くことによって芸術作品が「わかる」ようになった、という「わかること」の価値について記述しているものが多数見受けられた。</p>
問二	6.3	82.6	10.0	84.0	
問三	12.6	8.0	16.0	84.0	
問四	73.4	0.0	84.0	0.0	
問五	65.7	0.0	84.0	0.0	
問六	72.5	18.4	84.0	12.0	
問七	70.5	0.0	80.0	0.0	
問八	24.2	3.4	32.0	2.0	
問九	13.0	65.7	18.0	74.0	
問十	3.9	88.9	6.0	94.0	
問十一 I	0.1	43.0	2.0	60.0	
問十一 II	13.5	0.1	22.0	0.0	
問十二	19.8	0.0	30.0	0.0	
問十三	0.0	8.2	0.0	20.0	
問十四	5.3	32.4	6.0	40.0	